

第3号

2024年3月25日発行



愛媛大学社会共創学部 同窓会会報

愛媛大学社会共創学部同窓会

同窓会会長挨拶

愛媛大学社会共創学部同窓会
会長 谷口 丈太
TANIGUCHI Jota



愛媛大学社会共創学部同窓会会員の皆様には、日頃より同窓会の運営等にご理解とご支援をいただき、誠にありがとうございます。

今年度は、会員の皆様への情報発信の一環として「公式LINE」の運用開始や、昨年度好評であった「キャリアセミナー」の開催など、会員の皆様からいただいた会費を在学生への様々な支援に活用させていただくことができました。

今後も、上記のキャリアセミナーをはじめ、公式LINEやウェブサイトの運営、同窓会会報の発行等、同窓会会員と在学生の皆様のためになる活動を引き続き実施してまいります。

また、本年は社会共創学部同窓会（令和2年3月設立）の活動も今年で5年目となります。

今後、節目の年には同窓会会員の皆様とのイベントなどの企画も検討をしておりますので、是非楽しみにお待ちしておりますと幸いです。

それでは、今後とも社会共創学部同窓会への温かいご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

目次

同窓会会長挨拶	1
学部長挨拶	2
「社共卒業生による！キャリアセミナー～卒業生に聞くからどこよりもリアル～」	3
海外フィールド実習レポート	6
研究室紹介／谷本 貴之 准教授（産業マネジメント学科）	10
小長谷 圭志 講師（産業イノベーション学科）	11
片岡 由香 講師（環境デザイン学科）	12
石川 慶一郎 助教（地域資源マネジメント学科）	13
卒業生の声／石川 康平 さん（第1期生 産業イノベーション学科卒業）	14
清家 圭紀 さん（第2期生 産業マネジメント学科卒業）	15
退職の挨拶／西村 勝志 教授（産業マネジメント学科）	16
園田 雅江 准教授（産業マネジメント学科）	17
同窓会からのお知らせ・編集後記	18

※同窓会会報発行時は、令和5年卒業予定者となります。

愛媛大学社会共創学部

学部長 徐 祝旗

JO Shuki



令和6年1月1日に能登半島地震、1月2日に羽田空港事故と天災、人災が立て続けに起こり、私たちに大きな衝撃を与えました。生かされた教訓・対策と露呈した課題が入り混じった複雑な気持ちになり、改めて「備えあれば憂いなし」という言葉について考えさせられました。

時代は変革期に差し掛かっており、社会、産業、科学技術、生活、文化などは大きく変わっています。この変革期への「備え」として何が必要でしょうか。AIやDXが急速に広がっており、知識の大量習得・暗記だけといった「昭和式」「平成式」の高等教育では、私たちが直面している多層化・複雑化した地域社会の諸課題を解決することができなくなっています。これからの時代には新たな革新的知の備えが必要です。昨年もこの紙面で強調させて頂いたように、地域社会の諸課題の解決に果敢に取り組める人材が求められており、愛媛大学では、(1)確たる知識・教養と深い思考力、(2)チャレンジ精神と行動力の双方を身に付けた人材を育成することを目標としています。

社会共創学部では、地域社会のニーズに特化した教育研究を着実に展開しています。文理横断的な教育を行い、理論と実践をバランスよく配置したカリキュラムによって、学生は幅広い専門性を修得し、実践を通して課題解決力の向上に資する知的活動と展開を進めています。この取組は時代のニーズの先取りであり、未来への変革に備え、地域社会を共創する人材の輩出が社会から高い評価を受けています。令和4年から毎年開催されている社会共創学部同窓会主催の「OB・OGに聞くキャリアセミナー」に参加して頂いた皆様の立派な姿を見て確かな自信と細やかな自慢で胸が一杯になりました。

社会共創学部設置10年目である令和7月4月に、学部の教育課程の再編を行います。今までの「成功体験」に留まることなく、新たな備えとして教育・研究活動の深化と更なる発展に向けて努力してまいります。

令和6年の干支は「甲辰(きのえたつ)」です。「甲」は十干の最初で、物事の始まりの意味です。「辰」は十二支の5番目で唯一想像の動物で神の使者である「龍」です。「甲辰」は「新しいことに挑戦して成功する」「これまで準備してきたことが形になる」などの意味が込められているようです。皆さまにとって、愛媛大学社会共創学部にとって、更なるご活躍と実りのある一年であることをお祈りします。

皆様方には、引き続き、社会共創学部へのご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



「**社共卒業生による！ キャリアセミナー**」

～卒業生に聞くからどこよりもリアル～
を開催しました！！

2023年9月23日(土)、愛媛大学社会共創学部同窓会主催、愛媛大学社会共創学部共催により、昨年に続き「社共卒業生による！キャリアセミナー～卒業生に聞くからどこよりもリアル～」を開催し、社会共創学部1～3年生35人が参加しました。このセミナーは、在学生の皆さんに社会共創学部の卒業生が社会でどのように活躍しているかを知っていただき、今後の進路選択における参考としていただきたいとの思いから、同窓会役員会が企画・開催しているものです。

当日は、講師である社会共創学部卒業生10名の自己紹介を行った後、講師の就職活動や仕事などについての質問を受け付けました。続いて、就職支援委員長である園田雅江准教授をコーディネーター役としてパネルディスカッションを行い、「社会人生活で一番大変だったこと」「社会人生活で一番充実したこと」などについて講師の実体験を交えてアドバイスがありました。さらに、業界別座談会では、「インターンシップや説明会では聞けないリアルな就活」や「今後の就活に役立つアドバイス」など、普段はなかなか聞くことができない質問等を講師に投げかけるなど、参加学生の積極的な姿が見られました。

1. 講師の自己紹介

- 卒業年度
- 所属学科
- 名前
- 就職先
- 仕事内容



[講師の所属する業種]

公務員

広告、Webマーケティング

出版

製造業

食品

専門コンサルティング
(会計監査)

開発コンサルティング
(海外)

国際関連

スポーツ



2. パネルディスカッション



二次元コードを使用して匿名で質問を受け付けました!

3. 座談会



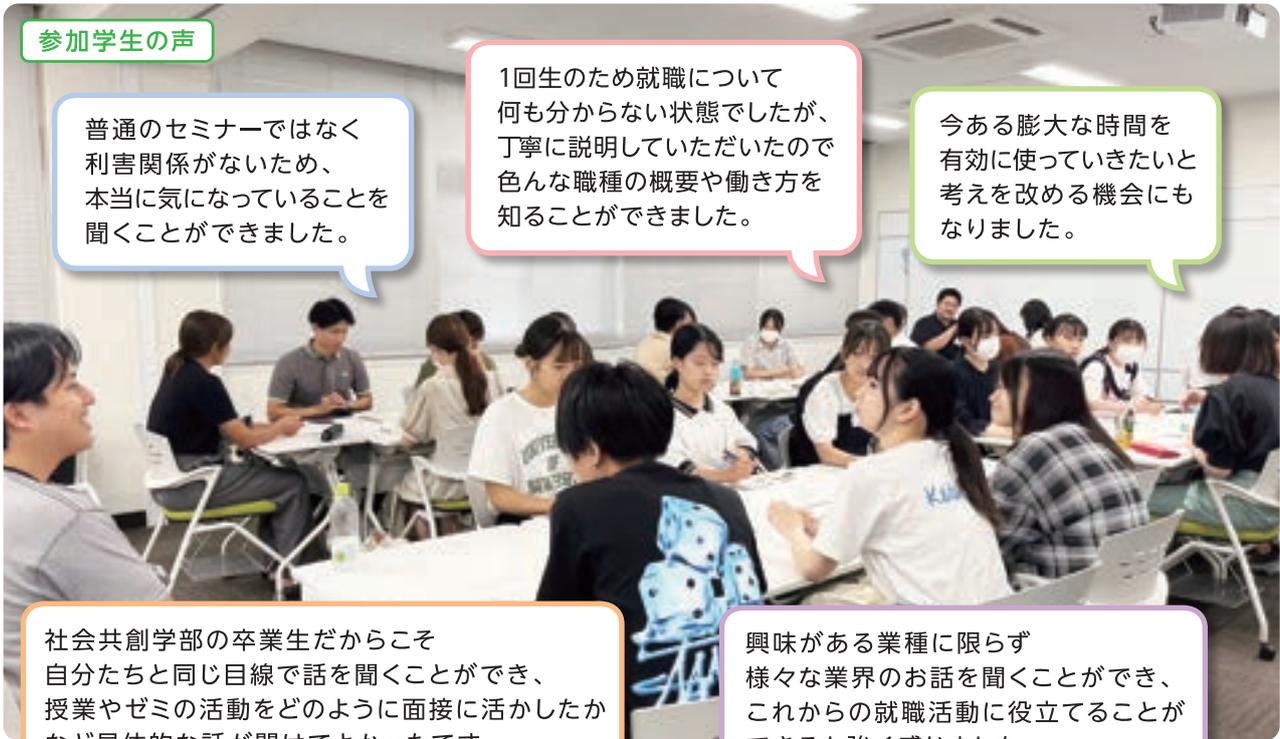
2年連続で「座談会」が最も満足度が高いコンテンツに選ばれました！

参加学生の声

普通のセミナーではなく
利害関係がないため、
本当に気になっていることを
聞くことができました。

1回生のため就職について
何も分からない状態でしたが、
丁寧に説明していただいたので
色々な職種の概要や働き方を
知ることができました。

今ある膨大な時間を
有効に使っていきたく
考えを改める機会にも
なりました。



社会共創学部
の卒業生だからこそ
自分たちと同じ目線で話を聞くことができ、
授業やゼミの活動をどのように面接に活かしたか
など具体的な話が聞けてよかったです。

興味がある業種に限らず
様々な業界のお話を聞くことができ、
これからの就職活動に役立てることが
できると強く感じました。



現場インタビュー



先輩たちが話しやすくて
いろいろなことが
聞けました。
どんな資格が必要か、
業種ごとの人の特性なども
知ることができたので、
自分に合う業種をこれから
見つけていきたいです！

産業マネジメント学科3年生
Nさん



今まで企業のインターンの中
にある座談会に
参加してきましたが、
正直本当に聞きたいことは
聞けなかったです。
でも社共の先輩たちは
距離感も近く気軽に質問が
できて本当参加して
よかったです！

地域資源マネジメント学科3年生
Iさん

参加学生による事後アンケートの結果では、非常に高い満足度を得ました！
社会共創学部同窓会の在学生向け支援のひとつとして、来年度以降も開催していきます。



海外フィールド実習 レポート!

この授業は、訪問国の大学の学生と協働でフィールド実習に取り組むことによって、国際コミュニケーション能力・国際性・協調性・社会性・課題解決能力を身につけることを目的としています。特に、参加学生は、海外の地域の様々なステークホルダーと英語や現地語でコミュニケーションを取り、その活動を通して異文化理解を深め、その地域が抱える課題の本質を捉え、変革することの意義と姿勢を学び、国際的課題に対する自己のモチベーションを形成することを目指します。また、本授業の参加学生に対し助成金として社会共創学部同窓会が支援しています。



インドネシア 【インタビュー】 Fさん(環境デザイン学科3回生) Hさん(地域資源マネジメント学科2回生)

Q1 海外フィールド実習に参加した動機は？

Fさん: インドネシアのごみ問題や生活環境について、日本とどのように違うのかを知るために参加しました。インターネットで調べるだけでなく、実際に自分の体で行くことで、より理解できるとともに何かを得ることができると思いました。また、自分の今の語学力がどれだけ通じるのか、インドネシアの学生とどのくらい交流ができるかという、自分にとって経験が無いことを行いたかったです。

Hさん: SUIJI-SLPを通してインドネシアに一度行ったことがあり、その際にインドネシアの食べ物や文化、また地域の人達の気さくな性格にほれ込みました。だからこそもう一度インドネシアに行きたいという思いがわき、今回のプログラムに参加しました。特にインドネシアの食文化は国土が広い分、地域によって様々な味がありとても興味深かったです。サンバルというペースト状のソースはインドネシア人がほぼ毎食使用している大切な調味料で、全土に約288種類のサンバルが存在しています。今回のフィールド実習場所であるジャワ州は、8割以上の種類のサンバルが集中しており、数多くのサンバルを食べてみたいと思いました。

Q2 現地での主な活動内容と、現地で感じたことや学んだことは？

Fさん: インドネシアの歴史や地形・地層を学ぶとともに、水環境や生活環境、コーヒー栽培について、インタビュー調査やフィールドワークで学ぶことができました。現地の生活環境は日本とは全く異なり、貧困の差がはっきりと分かるような環境でした。充実した住環境が整っていない小さな村でも、村全体で協力し、生きていくために制度や生活の仕方を工夫していました。日本にいただけでは全く考えもしないような住環境で、その中でも食べ物や水を得ていき、お金を得るために、仕事を選べない状況であることを感じました。

Hさん: バンドン工科大学(ITB大学)の大学生との交流、フィールドワークを行いました。私たちの訪れたフィールドは、お茶栽培が盛んに行われており、一面にプランテーション畑が広がっていました。そこで働かれている従業員さんたちの村を歩き、生活風景を写真におさめたり、ITB大学の先生であるイダム先生や、アリフ先生のお話を聞いたりしました。そこで学んだことは、お茶栽培だけでは十分な収益を得られない村人たちが違法



村で作られているコーヒー豆

鉱山で生計を立てていたという歴史でした。今ではこの活動は国の規制により禁止されていますが、まだその時の影響で周辺のお茶には水銀を含む場合があるとのことでした。この出来事から感じたことは、村人たちの生活を支えるお茶産業が経済的に彼らを守れていない危機感と同時に、彼ら自身で自分たちの問題を解決することは極めて困難であり、外部からの協力が必要だということです。

Q3 フィールドワーク中に社会共創学部の学びが活かされたことは？

Fさん：何か気になることがあった際は、現地の方や先生方に聞くことでよりそのフィールドを知ることができました。また、私は英会話がまだまだ不十分ですが、現地の方々や学生と言語の壁を超えてコミュニケーションをとることもできました。フィールドワーク中は話を聞いたり目で見たりするだけではなく、しっかりとメモを取り、写真を撮って記録することで、後日振り返った際に、良かった部分や悪かった部分を話し合うことができました。様々な方と知り合い、交流することができました。

Hさん：私にとって社会共創学部での学びは、一つの出来事を幅広い分野、視点から解決することにつながると考えています。今回のフィールドワークでは、ITB大学の学生さん(地質学)たちと共同で行いましたが、彼らの持っている専門的な情報、例えば、違法鉱山にある石の性質や周りの地層を実際の社会問題(違法鉱山による水銀被害、茶産業の収入減)を解決するための知識としてつなげるよう努力できたと思います。幅広い分野、人々の意見を集めて課題解決することを大切にしていた私たちは、最終発表の際に大学教授、生徒、日本人学生でワークショップを開いたり、地域の人とコミュニケーションが取れるように通訳を頼んだりすることができました。



Q4 フィールドワークでの学びをどのように今後活かしていくか教えてください！

Fさん：今後は、まず自分が幸せで裕福な環境で生活させてもらっていることを自覚することが重要だと感じました。しかし、裕福は人それぞれの価値観で異なり、それぞれの生活を否定せず、生きていくために様々な工夫をしている人々がたくさん存在していることを理解することが重要であると感じました。また、言語の壁があっても様々な遊びや伝統的な行事によって打ち解けることができることが分かったので、どのような人とも壁を作らずに積極的にコミュニケーションをとっていくことで親密になることができることが分かりました。

Hさん：今回の学びを通して、社会課題を解決するための活動は、一つの手段のみでなく、いくつかの手段を作っておき状況に合わせて柔軟に選択肢を使いこなすことが大切だと思いました。違法鉱山を禁止にした例を挙げると、禁止にするという目的は達成できたけれど、一方でこの策は地域住民の生活を向上または安定させる策にはなっていないどころか、収入減に繋がっています。このように問題を解決する手段を単一的にしてしまうと、必ず代わりに新たな問題もしくは課題を深刻化させてしまう可能性があるため、手段はいくつか用意し選択肢をいくつか作っておくことを今後は行っていきたいです。





海外フィールド実習 レポート!



カンボジア 【インタビュー】 Nさん(環境デザイン学科2回生) Rさん(環境デザイン学科2回生)

Q1 海外フィールド実習に参加した動機は？

Nさん: 私はもともと海外に興味があり、海外を訪れて自分の知らない世界を知ってみたいという気持ちが強かったです。また、コロナウイルスの流行でなかなか気軽に海外旅行に行ける環境ではありませんでしたが、その状況が明けたことも参加の動機の一つです。自分たちの普段の生活や食事とは異なる環境を学ぶということ、大学生のうちにしかならぬ経験できないような他大学との交流できること、カンボジアというなかなか出向くことのできない国に行けるということが海外フィールドワークに参加した主な動機です。

Rさん: 1つ目は外国と日本の違いを実際に見て感じたかったからです。今まで本やテレビなどでしか見たことがなかったため、実際に自分の目で見て体験したいと思いました。2つ目は大学で環境について学んでいるため、より詳しく海外の環境について考え、理解したいと思ったからです。3つ目は普段できない海外での生活を体験したいと思ったからです。日本での生活と海外での生活は異なるため、日本にいただけではできない体験ができると思いました。4つ目はカンボジアには世界遺産であるアンコールワットがあり、それを見てみたいと思ったからです。

Q2 現地での主な活動内容と、現地で感じたことや学んだことは？

Nさん: 現地では主に、地元住民に対してフィールドワークを行い、その結果を王立プノンペン大学で発表しました。母国が違う学生、地元住民とのコミュニケーションの難しさ、土地による生活の違いを感じることができました。また、水害が多い地域の方々を中心にインタビューを行ったのですが、なかには家の中に水が入ってきていることを知り、驚きました。現地での発表は英語で行いましたが、同じ英語という言語でも伝わる部分と伝わりにくい部分があり、コミュニケーションの難しさを感じました。私自身の語彙力が拙い部分もあったのですが、それ以上に母国語以外の言葉でコミュニケーションを取ることの難しさと楽しさを感じられました。



Rさん: 活動内容は、各地域に住んでいる方々に教育レベルや年収、生活、生活環境などのインタビューを行うことと、フィールドワーク、博物館など歴史的なものをみることに主でした。インタビューをしてみると、半分以上の人が小学校には行っていますが、中学校、高校で学習をした人はかなり少なく、カンボジアの教育レベルがあまり高くないことがわかりました。また住民の中でも収入には大きく違いがあり、収入の差によって生活水準も変わっていました。多くの方が政府に対して、道の改善や社会福祉の提供を望んでいるという事も知ることができました。そしてカンボジアで過ごした2週間で、人々の親切さや人間性の良さ、フレンドリーさを強く感じました。学生である私たちにできることをもっと考え、カンボジアの方々をもっと住みやすく今以上に自分の街を好きになる手助けをしたいと思いました。

Q3 フィールドワーク中に社会共創学部の学びが活かされたことは？

Nさん: 私は社会共創学部に入ってから、入学前よりもコミュニケーション力と積極性を身につけられたと感じています。そのため、現地でのフィールドワークでは、初対面かつ他言語の方ばかりでしたが、積極的にコミュニケーションを取ろうとすることができました。前述した通り、なかなか英語でのコミュニケーションは難しく、伝わりにくい時もありましたが、身振り手振りを活用して、自分のできる限りのコミュニケーションを図ろうとすることはできました。それは、社会共創学部での日々のグループワークやフィールドワークによる成果だと感じました。

Rさん: 私は学科の授業で環境について学んでいるため、カンボジアの生活環境や植物などの環境についてよく考えることができたと感じました。また、インタビュー結果のデータ分析やフィールドワークで注意する点なども、よく考えて行うことができました。他にも普段学部で行っているステークホルダーとの協働といった面では、地域の人々の話を聞き、自分たちにできることを考えるなど普段の学習を活かす事ができました。大学の学習で身につけた課題解決思考力も様々な問題を捉え、考える点において積極的に活用し、リーダーシップも頑張って発揮する事ができました。

Q4 フィールドワークでの学びをどのように今後活かしていくか教えてください！

Nさん: フィールドワークで身につけた、コミュニケーション力や積極性は、今後社会に出てからも活かすことができると感じています。また、私自身今後も海外実習や、海外旅行には機会があれば積極性に行きたいと思っているので、そのような時にも、今回の海外フィールドワークの経験は、活かすことができると感じています。また、現地の方へのインタビューを通して分かった、カンボジアの人々の生活環境を今後の学びに生かし、今まで以上に日本国内だけでなく海外の生活にも着目していきたいと思っています。自分たちの知らない世界があることを実際に学ぶことができよかったです。

Rさん: 今回のカンボジアでの海外フィールド実習では主に環境について調べたり考えたりしたため、普段大学で学んでいる環境の学習をより深く理解することに繋がりました。しかし、大学で行っている環境の学習は、地球温暖化などどちらかというと主に先進国で問題となっていることを多く取り扱っているため、日本に住んでいて感じたり考えたりすることとは違う視点で、環境との接し方を考えるきっかけとなりました。今後の学習では、どうしても大きく捉えがちな日本などの今住んでいるところや先進国の問題だけに注目するのではなく、違う立場でも物事を見るようにしたいと感じました。



愛媛大学社会共創学部

産業マネジメント学科 マーケティング論

私の専攻はマーケティング論です。マーケティングとは簡単にいえば、製品やサービスが売れる仕組みをつくることです。典型的には、ターゲット顧客を定め、そのニーズを満たす製品・サービスを企画し、価格をつけ、流通業者などの協力を得て販路を構築し、さらに各種メディアを通じて効果的に広告宣伝するといった一連の政策を計画・実践することです。これらを体系的に学ぶ学問分野がマーケティング論です。

マーケティングは、歴史的に製造業者（メーカー）を中心とする大企業で発展してきましたが、現在では非営利組織や自治体、さらには地域特産品や観光地の需要拡大・活性化策としても重視され、実践されるようになってきました。

私の研究上の主な関心は、地域特産品や地域企業へのマーケティングの応用と発展にあります。本学に赴任して17年になりますが、その間、地域ブランド論やその事例としての「日本ワイン」のブランド構築、6次産業化などの研究を行ってきました。最近では地域の中小企業、とくに食品分野の中小製造業のマーケティング戦略の研究に取り組んでいます。地域の中小企業は、大企業に比べて経営資源が相対的に限定されているという面はありますが、経営者のリーダーシップの下、卓越した技術や顧客ニーズを踏まえた製品開発、地道な営業努力などによって、優れた成果を上げているところも多いです。今後もそうした企業の実態調査を通じて、中小企業のマーケティングの特徴と課題について究明していきたいと考えています。

一方で、研究室の活動としてゼミナールがあげられます。ゼミ生はまず2年生でマーケティングの基礎的な考え方を身につけ、3年生ではその実践的応用として、全員で共通のテーマを決めてプロジェクトに取り組めます。今年度の3年生は、現在国内生産量2位の愛媛県産アボカドを売り出して、県の農業発展につなげていくという目的で、愛媛県産アボカドのマーケティング戦略の研究に取り組んでいます。最終的に4年生では、各自関心のあるテーマを決めて卒業論文を完成させ、社会へ羽ばたいていきます。

愛媛大学社会共創学部 産業マネジメント学科

准教授 谷本 貴之

TANIMOTO Takayuki



3年生ゼミ



4年生ゼミ

愛媛大学社会共創学部

産業イノベーション学科 農業工学

【研究室のテーマ】

私たちは、農業分野における計測技術の先端を追求する農業計測工学研究室です。農業は常に進化しており、私たちはその進化に対応するために、最新の計測技術や工学的手法を活用しています。当研究室では、様々な研究テーマに焦点を当てています。農地の効率的な管理、生産性の向上、環境への配慮など、農業の持続可能性を追求するための技術的な課題に取り組んでいます。具体的な研究テーマには、ドローンやセンサーネットワークを活用した農地のモニタリング、精密農業におけるデータ解析と意思決定支援、自動運転農機の開発などが含まれます。

【展望】

過去数年間で、私たちは多くの研究成果を上げています。これには、新しい計測技術の開発、農業生産の効率向上に関する手法の提案が含まれます。これらの成果は学術コミュニティで評価され、農業分野における革新的なアプローチの一翼を担っています。私たちの目標は、研究成果が社会に実装されることです。

【学生・卒業生の皆さんへ】

私たちの研究室では、積極的で熱心な学部学生・大学院生を歓迎しています。農業計測工学の分野での研究に興味をお持ちの方、先端技術を駆使して社会に貢献したいと考えている方は、ぜひ私たちの研究室にお越しください。共に学び、成長し、未来の農業に新たな価値をもたらしましょう。ご質問や研究室訪問の希望があれば、お気軽にお問い合わせください。私たちはみなさんと一緒に未来の農業技術を築くために協働できることを楽しみにしています。

ものづくりコースの詳細は以下のWebサイトをご覧ください。

<https://ec.cri.ehime-u.ac.jp/>



愛媛大学社会共創学部 産業イノベーション学科

講師 小長谷 圭志

KONAGAYA Keiji



研究機器による分析の様子



卒業研究の様子

愛媛大学社会共創学部

環境デザイン学科 景観デザイン

主な研究テーマは、「地域において、いかにして地域愛着を醸成できるか」です。元々私は景観工学を専門としていますが、この分野は、公共空間や社会基盤施設（道路や橋梁、河川、港湾など）について、周囲や地域（歴史・文化などの要素も含む）との調和や視覚的に好ましい形態を見出すこと、人々にとって良好な形態や条件について明らかにすることを目標にしています。

十年前に愛媛大学に来てからは、兼任している松山アーバンデザインセンター（公民学連携で公共空間を良くしていこうと取り組んでいる組織）のメンバーとして、松山市の公共空間整備の現場に関わらせていただく機会が多くなり、整備された空間が地域の人達の活動舞台となるにはどうすればよいかに関心を持つようになりました。私はそこに地域愛着が深く関わっていると考えており、公共空間の整備プロセスや地域の方々の意識の変化に着目した研究を行ってきました。

また、良好な公共空間があるだけではなかなかまちづくりは進みません。多くの地方都市において、地域の存立を維持していく上で、いかにしてまちづくりを担う人材を育成するかについても課題となっています。実際にまちづくりの担い手育成プログラムを実践しつつ、従来の研究では十分に検討されてこなかったまちづくり学習による地域連携や、現実のまちづくり活動への展開の可能性、人材育成のあり方を検討しています。

研究室でのゼミ活動では、景観工学という専門にとらわれず、所属学生の皆さんの関心の高いテーマから自由に研究テーマを設定して研究を進めています。ただし、どのようなテーマであっても、空間と人との関係を読み解くような視点を大事にして進めています。

今後も地域の人々が自身の住む地域に愛着が持てるような空間づくりに寄与する研究に取り組んでいきます。

愛媛大学社会共創学部 環境デザイン学科

講師 片岡 由香

KATAOKA Yuka



県外での現地調査の様子（滋賀県近江八幡市）



ゼミの様子

愛媛大学社会共創学部

地域資源マネジメント学科 人文地理学

私の専門分野は人文地理学です。地形や気候といった自然現象を対象にする自然地理学に対して、人文地理学は人口、経済、文化、政治といった人間活動に関する現象を対象にします。私の主な研究テーマは都市内部構造の解明です。具体的には、都市内部の人口分布に着目し、その変化のプロセスやメカニズムについて人口移動の面から検討しています。

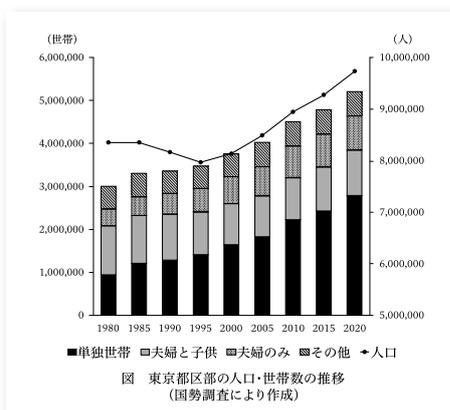
日本の大都市では高度経済成長期以降減少してきた都心の人口が1990年代後半を境に増加しています。どのような人たちが都心で増えたかについては都市による違いがあり、東京圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）の都心（東京都区部）では単身者が増加しています。東京都中央区の民間賃貸マンション居住者を対象に実施したアンケート調査では、対象者に20歳代後半～30歳代の未婚者が多いこと、彼らは職場や駅の近さを重視して住まいを選択し、2～3年ごとに都心で住み替える傾向があることが分かりました。都心居住の未婚者の中には新築の分譲マンションを購入する人もいます。東京都中央区の分譲マンション居住の未婚者を対象に実施したアンケート調査では、対象者は都心の民間賃貸住宅を転々としたのち、30歳代～40歳代前半にマンション購入する傾向がありました。その多くは、職場や駅の近さに加えて間取りや部屋のタイプを重視し、現住居での永住を予定しています。たとえ結婚や親の介護で自分のマンションを離れることになっても、資産価値が高い都心のマンションであれば、売却したり賃貸したりすることができます。

地方や郊外から都心に転居してきた若者が、従来のように結婚・出産を機に郊外や地方に移動することはせずに、未婚のまま都心に滞留している。これが人口移動の面からみた東京都心の人口回復の背景です。コロナ渦を経てもなお人口の東京一極集中は続いており、東京都心では今後も未婚単身者の増加が見込まれます。一方で、都市居住者の所得格差は拡大の一途をたどっています。実家を頼れない未婚者はシェアハウスを借りたり、ルームシェアをしたりしながら、家賃支出やケアを分担し、工夫して東京都心に住み続けることでしょうか。

愛媛大学社会共創学部 地域資源マネジメント学科

助教 石川 慶一郎

ISHIKAWA Keiichiro



六本木ヒルズの屋上から望む東京都心

愛媛大学で得た唯一無二の経験

大学生活を振り返ると、「人との出会い」と「様々な体験・学び」を経験でき、今までの人生の中で最も濃い4年間を過ごすことができました。

私は愛媛県四国中央市出身で、高校まで県内で過ごしたため、県外に住むことはおろか、県外の方との関りもほとんどありませんでした。私が大学時代に所属していたダンス部は愛媛県出身者が少なく、愛媛県の方言が伝わらなかつたり、根本的な考え方が違つたりと何をするにも新鮮でした。また、2017年に開催された愛媛国体の開会式のパフォーマンスの指揮をダンス部の顧問が行つたため、様々な学校に赴いて練習指導を行つたり、様々な施設で宣伝活動をさせていただいたりしました。愛媛国体を通して、普通の大学生では体験できないような貴重な経験をすることができました。

大学の授業では、社会共創学部第1期生だったため、前例がないという不安がありました。しかし、先生方の丁寧な授業と、共に学ぶ愉快的な仲間のおかげで充実した学びを得られました。特に印象に残っているのは、リーダーシップの在り方の一つである「サーバントリーダーシップ」という考え方に触れたことです。サーバントリーダーシップとは、一般的な「支配型リーダーシップ」とは違い、上司が部下に指示を出して部下を動かすのではなく、部下の目標や想いを支援し、部下を信じ、時には一緒に動きながら部下を導いていくリーダーシップの形です。今までに触れたことのないこの考え方に感銘を受け、現在は愛媛県の化学メーカーの人事として、2,000名を超える従業員の皆さんをサポートする仕事に従事しています。

今の自分は愛媛大学、そして社会共創学部での学びがあったからこそだと思いますし、この学びが無ければ今の自分はないと思っています。これからも、この気持ちを忘れずに取り組んでいきたいと思っています。



第1期生 産業イノベーション学科卒業

石川 康平さん

ISHIKAWA Kouhei



充実した大学生活、今の私

2021年3月に産業マネジメント学科を卒業し、現在は松山市内の広告や出版物を取り扱う会社で働いています。

私は農業高校出身で、高校卒業後に就職する人も多い中、大学に進学するイメージがあまりなかったのが当時の正直な気持ちでした。しかし、担任の先生からの「愛媛大学に新しくできたばかりの学部があるからそこを目指してみたら？」というアドバイスと、地元で活躍できる人になりたいという思いから、地域と密に関わることができるこの学部の魅力を感じたことを覚えています。

大学生活は長いようであつという間の4年間でした。経営学や経済学、人的資源を学ぶ座学はひとつひとつが新しい発見で、知らないことを知るおもしろさを日々感じていました。座学はもちろん、最も多くの学びを得たのはフィールドワークでした。地域の課題を解決するにはまず、地域をよく知り、仮説を立てることから始まります。フィールドワークに重きを置くゼミに所属していたこともあり、実際に足を運び、地域の声を聞く機会は多かったと思います。特に、NPO法人の方たちと一緒に企画から行い、とあるイベントに出店したことがとても楽しく、印象に残っています。こうした実践的な活動を通して、「地域の情報を発信できる仕事に就きたい」と思ったことが今の仕事の業界を志望した理由です。実際に今では取材に出かけ、原稿を書く編集の仕事をしています。「今の世の中の流れがこうだから、こんな企画があればおもしろいかも」と仮説を立てて企画を立てることもあり、大学で学んだことをしっかりと活かすことができます。

書いた記事をきっかけに、読者がお店に足を運んでくれて、それを喜んでくれるお店の方の声を直接聞くことができる仕事にやりがいを感じていますし、地域の役に少しでも立てていることに誇りを感じます。これからも、誰かを笑顔にすることができる素敵な編集者として活躍できるよう日々頑張っていきたいと思います。

第2期生 産業マネジメント学科卒業

清家 圭紀さん

SEIKE Tamaki



社会共創学部における私の歴史と サーバントリーダーシップ

愛媛大学社会共創学部 産業マネジメント学科
教授 西村 勝志
NISHIMUEA Katsushi



振り返れば、私が愛媛大学法文学部に赴任したのは1995年でした。それから29年間にわたる教員生活で、多くの先輩方から叱咤激励を受け、後輩には下支えしてもらい、感謝に堪えません。その中で特に思い出深いのが、2016年の社会共創学部(新学部)の設置です。当時すでに、人口減少に伴って地方消滅が叫ばれる時代を迎えており、「地域とともに輝く大学」をVISIONとした本学は、地域社会のために何ができるかを思案し、地域系新学部の設置を決断したわけでした。そのため、当時、新学部設置準備室長であった私は、「疾風に勁草を知る」を座右の銘として、「我は勁草たれ」を胸に、仲間とともに何度も文科省に足を運び、設置申請を試みました。

新学部設置の意義・目的・内容を分かりやすく説明するだけでなく、地方国立大学における他の地域系学部との差別化を図り、社会的要請によるものである点を強調しました。そして、法文学部での「ミッションの再定義」で学んだ特色・強みの打ち出し方を大いに活かし、文科省の了承を取りつけました。

当たり前のことですが、横並びの教育ではなく、尖った教育を打ち出せなければ、これからの地域社会を牽引し、国際社会を股にかけて活躍できる人材を育成できません。現状維持は衰退であり、変革こそ進化をもたらすものです。まずは、自己のマインドを変える必要がありましたが、既存の六学部から思考・思想・信条が全く異なる多くの教員が集結しているので、彼らも意識改革する必要がありました。既存の立場をいったん離れてもらい、ゼロベースをスタートできるよう、目的を共有し、仲間意識を高め、仲間を下支えするサーバントリーダーシップを駆使しました。この体験がそのまま、新学部の教育内容に活かされています。そして、社会環境の変化が著しい今日、まさにこれが不可欠と想われてなりません。皆様方には、本学で学んだことを自信に代え、地域を牽引していただければと願っております。



社会共創学部設置当初の教職員集合写真

社会共創学部8年間の思い出

愛媛大学社会共創学部 産業マネジメント学科
准教授 園田 雅江
SONODA Masae



私の愛媛大学におけるキャリアは、2016年4月開講の愛媛大学社会共創学部とともにあります。そろそろ故郷の松山に戻ろうかと家族と話していた時に、愛媛大学に新しい学部がスタートすることを知りました。その設立理念は、私自身が仕事を通して考え実践してきたことと重なることに感動し、微力ながらお役に立ちたいと考えたことからご縁が繋がりました。

社会共創学部の8年間で最も印象深いことは、やはりプロジェクト演習(ゼミ)で、学生の皆さんとともに議論しながらプロジェクトに取り組めたことです。産業マネジメント学科では、2年生後学期からゼミがスタートし1年半かけてプロジェクトに取り組むことができます。卒業演習も含めるとゼミ生とは2年半のお付き合いとなり、それぞれの個性もわかり、少人数ゼミのメリットを最大限に活用できたと思います。仲間とともに議論や調査をしながら取り組むゼミ活動は貴重な時間と経験をもたらしたのではないかと考えています。

また、前職での経験もあり、学部の就職支援委員長を長らく務めさせていただきました。就職支援を通して、就活生の皆さんとの接点ができ各学科・コースの特徴なども理解できた気がします。幸いにも、ここ数年は学生優位と言われる状況が続き、社会共創学部の卒業生の就職率は1期生から100%近い結果を出しています。しかしながら、どのような状況下であっても当人は不安でいっぱい緊張しています。どう寄り添っていくのか?を常に考えていた日々でした。この会報をご覧いただいている皆さんは既に社会でご活躍中ですが、母校や出身学部に卒業生としての誇りをもって、これからの人生を充実させて欲しいと願って止みません。私のつたない経験においても、ヒューマン・ネットワークが自身のキャリアに重要な役割を果たしています。同窓というのは心強いものです。「絆を大事にね!」という言葉を最後に贈って退職のご挨拶と致します。



プロジェクト演習報告会

同窓会からのお知らせ

●同窓会の活動について

「愛媛大学社会共創学部同窓会」は、第1期生の卒業に合わせて、令和2年3月に設立されました。同窓会は、愛媛大学及び社会共創学部の発展に寄与することを目的に活動していきます。

●同窓会ホームページについて

令和4年1月末に、同窓会ホームページを開設しました。同窓会活動に関することや同窓会会員である皆さまへのご連絡等を、定期的に発信していきます。また、同窓会会報も年1回程度、掲載していきますので、ぜひご覧ください。

<https://www.cri-ehime-u-graduate.jp/> ▶



●会員情報登録・変更のお願い

同窓会を運営するにあたり、社会共創学部を卒業された正会員の皆さまの情報が必要となります。また、住所や電話番号等の変更がありましたら、変更手続もお願いします。

なお、皆さまからお預かりした個人情報については、「愛媛大学社会共創学部同窓会個人情報保護方針」に則り、適切に個人情報の保護に努めます。

●会費納入のお願い

同窓会設立前に入学された皆さま(平成28～令和2年度)については、入学時に同窓会会費を納入していただいております。同窓会の予算は、皆さまからの会費(一人20,000円 初回のみで以後は必要なし)があって成り立っていますので、未納者の方につきましては、ぜひ納入をお願いします。

●公式LINEのご登録のお願い

社会共創学部同窓会の公式LINEへの友達登録をお願いします。友達登録をしていただくと、本会報含む同窓会活動の内容をご確認いただけます。また、会員情報の変更(事務手続き全般)やイベントの案内など、同窓会に関する連絡は一括してこの公式LINEにて行います。ご登録はQRコードより読み取りをお願いします。

ID: @688jsczb

愛媛大学社会共創学部同窓会で検索!



編集後記

社会共創学部同窓会会報第3号の発行にあたり、ご協力頂いた皆さまには厚く御礼申し上げます。本会報では新たに「海外フィールド実習レポート」のコンテンツを追加し、学生がインドネシアやカンボジアで実際に経験して学んだことや感じたこととお話いただきました。また、昨年度に引き続き開催した「キャリアセミナー」については、参加学生の声に加えてインタビューも掲載しました。本会報を読んでいただく皆さまに少しでもイベントの雰囲気を感じていただけると嬉しいです。今年度の活動の反省を踏まえ、来年度も多くの在学生への支援、会員の皆さまへの情報発信ができるよう同窓会一同尽力してまいります。

これからも、社会共創学部同窓会の活動にご協力とご支援をいただけますと幸いです。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

〈発行者〉 愛媛大学社会共創学部同窓会事務局

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番(愛媛大学社会共創学部内)

E-mail: support@cri-ehime-u-graduate.jp